

子どもの二言語同時習得における 言語的認知要因と環境要因の検討

許 佳 美

On Linguistic-Cognitive and Environmental Factors
for a Child's to Learn Simultaneous Bilingualism

Kyo Yoshimi

問 題

言語の産出は乳児期の後期の段階のものである。しかし、実際、言語の産出にいたるまで、乳児は様々な音声環境の中に包まれ、多くの音声言語の理解と経験を積んで、やっと言語産出の段階に辿りつくのである。林(1999)の研究では「音声言語の理解は言語の産出よりはるかに先行する」と主張する。乳児の言語獲得過程は二つに分かれるという。1. 音声言語として処理され、記憶され、理解される。2. 音声知覚を他者とのコミュニケーションの手段として、養育者との相互交渉をとおして、言語産出という段階へと発達する。従って、ここで述べる言語獲得とはその言語を理解することと産出することの両方をいう。Kuhl, Deguchi, Hayashi, Stevens, Dugger, & Iverson (1997) は日本人乳児における「r」と「l」の聴覚弁別能力をオペラント条件づけ法で研究を行った。その結果、乳児は6ヶ月の時にすでに高い感受性を持ち、「r」と「l」の弁別ができた。しかし、その乳児らが10ヶ月の時に「r」と「l」の弁別ができなくなった。「r」と「l」に対する感受性が低下したと考えられるが、実際、10ヶ月児の場合、音声言語も含む言葉に対する理解の能力がだんだん高くなり、日本語の中に「r」の発音がないので、区別するのが不必要であり、それを積極的に無視するような機構が働いていると考えられる。

このように、言語獲得の過程においては、言語の認知的要因と環境要因が同時に働きかける。正常児の場合一般的に、言語の獲得において、認知面では大きな差はない。しかし、環境面では言語の入力や養育者との相互交渉の有無で大きな差が生じる。例えば、人間世界から隔離され、言語刺激や社会・文化的、母性的刺激が剥奪された子どもたちの回復経過についての研究がいくつかあるが、いずれも言語の文法面、意味面、および音韻面の完全な回復は可能ではないことが明らかになっている(例：フォイエルバッハ, 1991)。

子どもの言語獲得には、その子どもを取り囲む環境の要因が大きい。子どもにとっては生まれ育った地でその地の言葉を覚え、さらにその言葉が両親の母語であれば獲得が容易である。

また、それが両親の母語でなくても、その環境の中で生活する限り、必要があれば、子どもが大人より容易に現地の言葉をマスターできる。さらにネイティブの子どもとほとんど差がないようになることもよくある（例えば、アメリカ在住の日本人、中国人などの子どもの英語、または、日本在住の中国人などの子どもの日本語）。しかし、外国で生まれ育つ子どもに両親の母語を習得させることはなかなか難しいことである。子どもの母語教育に頭を悩ます親が数多くいる。

外国で生活している子どもに母語を習得させるのには少なくとも2つの問題がある。すなわち、1. 母語学習の環境がととのっているか、2. 学習児の年齢は何歳が有効であるか、が問われる。本研究では日本にいる日本人の父と中国人の母の間に生まれた子どもを例にとってこのことを考えてみたい。

近年、来日の中国人の増加につれて、日本で生まれ育つ中国人の子ども、あるいは両親の一方は日本人で、もう一方は中国人の子どもも増えてきている。その子どもたちを取り囲む家族構成は、親の両方とも中国人、親の一方は中国人、もう一方は日本人というのが多いであろう。それらの家庭で使用する言語は3パターンがある。1. 家庭内では中国語、家庭外では日本語、2. 家庭内では中国語と日本語混用、家庭外では日本語、3. 家庭内でも家庭外でも日本語、である。

まず学習の環境問題がある。日本在住の子どもに中国語を習得させるためには、中国語の入力環境が大切である。日本に在住しながら、中国語の学習環境がととのっていることはなかなか難しいことであるが、幼い子どもにとっては家庭環境が重要な位置を占めているので、上に述べたパターン1. 家庭内では中国語、家庭外では日本語、2. 家庭内では中国語と日本語混用、家庭外では日本語という環境は中国語を学習するに適した環境があると考えられる。

次に学習児の年齢の問題がある。劉（1995）は中国語を第2言語として習得する子どもの事例研究をし、中国語を正しく使えるようになるのは子どもが3歳ころになって、二言語を使用しているという言語意識の芽生えによるものであると主張する。

ところが、第2言語の習得を始めるのは子どもがそれを意識できるようになってからでよいわけではない。なぜなら、それまでの音声面、音韻面および語彙の蓄積がたいへん重要であるからである。Kuhl et al. (1997)の研究で述べたように、日本語を第1言語として習得させる過程において、習得児は日本語にない、他の言語の発音を積極的に無視することがあると考えられる。従って、幼いころから発音の弁別能力を保たせると、それがのちに日本語以外の言語を産出する段階に至る時に役に立つと考えられる。また、言語意識が芽生えた子どもにとっての第2言語の学習は、学習しなくても日常生活に支障のないものを勉強させられることになるので、勉強意欲がなく、消極的な態度をとることもありうる。従って、より小さいころから母語を習得させることはのちに両言語併用、つまりバイリンガルになるのにどんな役割があるかを検討する価値がある。

バイリンガルには、産出二言語使用者と受容二言語使用者がある。産出二言語使用者とは二言語の発話を併用することができるものを指し、受容二言語使用者とは一方の言語（少数言語）の入力量が少ないため、その言語で言われることは理解できるが、自ら発話ができないものを指す。Taeschner (1983)は二言語を同時習得することについて、「初期一言語システム説」を提言した。つまり、1. 一語彙システム：二言語の同義語で表現することができない段階、2.

語彙レベルの二言語の分離：二言語の同義語で表現することができる段階、3、「一人の人間は一つの言語で」：二言語の語彙量が次第に均衡になる段階、の3段階区分のように、年齢によって順序に発達してくる。この三つの段階を経て、語彙システムも統語システムも分離された二言語でそれぞれ相手の使用言語にあわせて対話することができ、本当の二言語使用者になる。

子どもに一つの言語を覚えさせることには、言語入力が必要な役割を果たしている。母親（あるいは養育者）の入力形態—たとえば、動詞優位入力か、名詞優位入力か—が子どもの語彙獲得の結果とどのように関連するかについての研究が数多くある（Tardif, 1996；Tardif, Shatz & Naigles, 1997）が、必ずしも一致した結果が得られていない。また、子どもの語彙獲得において名詞優位か述語優位かの議論も長く続いている。Gentner（1982）は「自然分割仮説」で名詞と述語の区別は「人や物のような具体的概念」と、「活動、状態の変化、因果関係のような叙述的概念」の間のすでに存在している概念的区別に基づいていると説明し、また「関係相対性仮説」でわれわれが知覚世界を語彙化する時、関係をあらわすタームの割り当ては、比較言語学的に名詞類より、変動しやすいと説明し、名詞優位説を主張する。

小椋、吉本、坪田（1997）の研究では、日本語獲得児が母親の言語入力が動詞優位であるにもかかわらず、英語圏の子どもと同じ名詞優位であるという結果が得られた。また、日本語獲得児の初期の言語はマンマ、ワンワン、ブーブーのように成人語とは系統の全く違う「語」や成人語からの音韻転化によってできている「幼児語」といわれている語が多く含まれている。なかに特に擬音語、擬態語、すなわちオノマトベがかなりの割合を占めている。英語圏の初期言語習得児においても（小椋ら、1999）、中国語圏の初期言語習得児においても、オノマトベの割合が少ない。これは日本語のオノマトベが英語に比べ、語彙として体系化されている（スコウラップ、1993）という日本語自身の要因も関係していると考えられる。

本稿では日本在住の母が中国人であるその子どもに日本語を習得させると同時に中国語をも習得させることは、中国在住の中国人の子どもに中国語を習得させることとはどのような違いがあるか、また、習得の結果においてどのような差があるかを明らかにしたい。

本研究に参加した2人の被験児は、中国在住の1999年9月現在20ヵ月の女児1人と、日本在住で父は日本人、母は中国人の19ヵ月の男児1人である。異なる言語構造と異なる文化的背景をもつ環境の中に誕生し、発達していく子どもの言語獲得の過程はどのような共通性とどのような差違があるのだろうか。本研究では2人の被験児の月齢が相対的に低いため、主に語彙の獲得に着目し、獲得された語彙の意味分野にどのような特徴が見られるかを明らかにする。

目的

0才の乳児でも音声知覚能力が著しく発達している。これはのちに言語の獲得に大いに関係がある。そこで、日本在住の子どもT児を0才の時から日本語と中国語の二言語を併用して聞かせ、1歳代後半から言語を獲得する時、二言語を併用することができるようになるか。また、中国語の習得過程、習得結果を中国在住の中国語を習得している同年齢の子どもY児と比べ、どのような差があるかを研究する。

仮説

1. 乳児期の比較的早期の段階から二言語を併用して聞かせることは、のちに言語獲得年齢になる時、二言語を併用すること（産出二言語）が可能になることに大いに関わる。
2. 子どもに日本で中国語を習得させる場合、家庭内に中国語環境があるにもかかわらず、日本語環境が優位であるため、中国語の習得は中国在住の中国人の子どもに比べ、中国語の獲得の遅れが見られる。

方 法

本研究で被験児が置かれている家庭内環境：Y児（女）、月齢20ヵ月、中国在住、家族構成は祖父母、父母と5人家族。家族全員が中国語を使用する。T児（男）、月齢19ヵ月、日本在住、家族構成は父は日本人、母（筆者）は中国人の3人家族。家庭内では父母の間でのコミュニケーションは日本語を使用する。父はT児に日本語で話しかけ、母は日本語と中国語の二言語を併用し、同じことを日本語と中国語の順で表現して聞かせる。二言語を併用する理由は言語獲得がまだ完全にできていない乳児にとって、「一人の人間は一つの言語で」という概念がまだ成り立っておらず、言語の獲得過程において困難に陥りやすいこと、また聞かせる順番が日本語からの理由は保育所などの集団生活に馴染みやすいためという考慮からである。

T児には6ヵ月ころから時々中国語で話しかけていたが、場面設定などがなく、系統的ではなかった。12ヵ月のときから日本語と中国語の二言語を併用して聞かせるようになった。16ヵ月以前の二言語の産出、理解状況は母の日誌記録による。「パパ、ママ、マンマ、ネンネ、ワンワン、ブブ（お茶）」など以外の言葉を産出したのは16ヵ月ころであるので、16ヵ月から場面を設定してT児と話のやりとりの場面をビデオを利用して観察した。ビデオは応接間の一角に置いてあるテレビの上に設置し、T児があまり気付かないようにビデオ撮影の時リモコンを使用し、普段撮影しない時でもそのまま設置しておく。絵本を読み聞かせる場面でより二言語が多く使われることを考慮した。ところが、時どき被験児が絵本に集中して話を聞くことができないことがあり、また、絵本はT児にとって聞き手になりがちなところもあるので、絵本場面と自由遊び場面を週に1回交換し、10分の中カウンタバランスをとり、5分間中国語、5分間日本語で話しかける。毎回ビデオをとり、中国語と日本語のそれぞれ獲得した語彙とその時のT児の月齢を記録した。また、ビデオでは産出しなかったが、日常生活の中で産出した語彙は母の日誌記録による。

Y児のデータはY児が母と一緒に遊ぶ場面、あるいは母がY児に絵本を読み聞かせる場面をY児の父にビデオをとってもらい、そのビデオに基づいて獲得した中国語の語彙とその時のY児の月齢を記録してもらい、ビデオを撮る状況はT児とできるだけ同じように設定すると依頼した。

結 果

まず、仮説1の「乳児期の割り合い早期の段階から二言語を併用して聞かせることはのちに言語獲得年齢になる時、二言語を併用すること（産出二言語）が可能になることに大いに関わる」に基

づいて、T児の19ヵ月までの間に、産出できるようになった日本語と中国語の語彙をTable 1に示す。

T児の語彙獲得状況は、全体的に日本語の語彙のほうが産出が早い。中国語の産出は日本語と同音、あるいはほぼ同音の語彙を除いて、日本語の31語に対して、たった7語（没有、車、再見、魚、馬、汽車、看看）だけである（Table 1）。

日本語のオノマトペをそれ以外の語彙より早く理解し、早く産出する特徴が見られた。また、日本語のオノマトペ（中国語と同音、あるいはほぼ同音の語彙を除いて）の獲得は同意味の中国語と比べ、理解段階においても平均2ヵ月以上早くなっている。

また、T児は親の言語入力が動詞優位であるにもかかわらず、日本語の語彙に名詞が圧倒的に優位であるという結果が得られた。

Table 2はT児においてまだ産出はできないが、理解はできる語彙を示す。日本語にはオノマトペが含まれていないことと、日本語と同じ意味の中国語もほぼ同時期に理解ができていることを示す。日本語の語彙数は中国語の語彙数より多く、21語対15語となっている。

Table 1 T児の日本語と中国語の産出と理解できた語彙

T児の発音	日本語	月齢	中国語	月齢
ma m ma	マンマ*	10 (8)		
ma ma	ママ	10 (6)	媽媽 (ma ma)	—
ne n ne	ネンネ*	11 (10)	睡覺 (shui jiao)	(14)
wa n wan	ワンワン	11 (10)	汪汪汪 (wang wang wang)	—
ba ba	ババ	12 (7)	爸爸 (ba ba)	
bu-bu	ブブ (お茶)	13 (11)	茶 (cha)	(16)
nya-nya	ニャーニャー	13 (11)	咪呀呜 (mi ya wu)	
ga-ga	ガーガー	14 (12)	嘎嘎 (ga ga)	—
go go	ゴッコ (にわとり)	14 (13)	咯咯咯 (ge ge ge)	
ku ku	クック	15 (13)	鞋 (xie)	(15)
ko rei	これ	15 (13)	这个 (zhege)	(15)
na i na i	ナイナイ*	15 (10)	没有 (mei you)	17 (15)
bu-bu	ブーブ (車)	15 (13)	車 (che)	19 (17)
bo-bo	ボ〜ボ (帽子)	15 (14)	帽子 (mao zi)	(15)
ha i	はい	15 (13)		
po po	ポポ (はと)	15 (11)		
i ta i	痛い*	15 (14)		
mo-mo	モーモー (うし)	16 (13)		
pa n	パン	16 (14)	面包 (mian bao)	(16)
po n	ポーン*	16 (14)		
ba i ba i	バイバイ*	16 (14)	再見 (zai jian)	19 (16)
pa ku pa ku	パクパク*	16 (14)		
ba-ba	バーバ	17 (14)		
zo-	ゾウ	17 (13)	大象 (da xiang)	(15)
mi mi	みみ	17 (15)	耳朵 (er duo)	(15)
mei mei	めめ (目)	17 (15)	眼睛 (yan jing)	(15)
i ya	いや*	17 (16)		
yi		(13)	魚 (yu)	18 (18)
ma		(15)	馬 (ma)	18 (17)
te te		17 (15)	手 (shou)	(17)
pa n da	パンダ	18 (14)	熊猫 (xiong mao)	(15)
ba na na	バナナ	18 (14)		
bo-ru	ボール	19 (11)	球 (qiu)	(13)
ji-ji	ジージ	19 (15)		
ba si	バス	19 (17)	汽車 (qi che)	19 (17)
cho cho	蝶々	19 (18)		
gan gan		(16)	看看 (kan kan)	19 (16)

註 () 内の数字は理解できた語彙の月齢；*は述語；—は日本語と中国語の発音が近いものを表す。

T児の日本語と中国語の産出語彙量の比較を以下のFig. 1に示す。

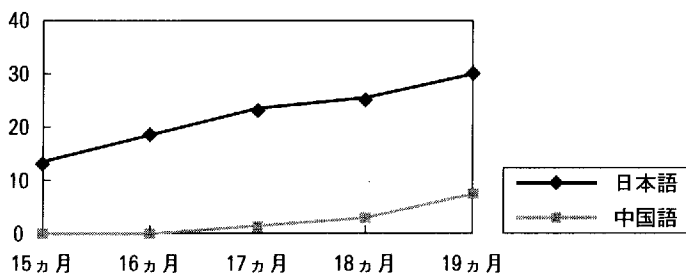


Fig. 1 T児の日本語と中国語の産出語彙量

Table 2 T児において産出できないが理解できる日本語と中国語の語彙

日本語	月齢	中国語	月齢
花	10	花	9
ありがとう	11	謝謝	11
電話	11	電話 (ほぼ同音)	
とら	12	老虎	13
おいで*	12	来	12
時計	12	鐘	12
電気	12	电灯	12
うさぎ	13	兔子	13
ちょうだい*	14	給	14
服	14	衣服	14
きりん	14	長頸鹿	14
さる	14	猴子	14
おすわり*	15	坐 (坐下)	16
歯磨きする*	15		
ライオン	16		
足	16	脚	16
口	16	嘴	17
おしっこ	16		
うんち	17		
りんご	17	苹果	17
ねずみ	18		
ごめんなさい	19		

註 *は述語である

仮説2の「子どもに日本で中国語を習得させる場合、家庭内中国語環境があるにもかかわらず、周囲に日本語環境が優位であるため、中国語の習得は中国在住の中国人の子どもと比べ、中国語の獲得の遅れが見られる」に基づき、T児とY児の中国語語彙の獲得状況を比べた結果をTable 3に示す。

Y児の中国語の産出語彙では父、母を除く人物の名称、たとえば、日本語で当てはめると「ジージ、バーバ、弟、おばちゃん」に当たるものが割合早く獲得された。中国語の産出語彙を品詞で分類すると、名詞が圧倒的に優位であるという特徴が見られた。名詞は動物の名称をあらかわすものが最も多く、次は積木、ボール、風船のようなおもちゃ類の名称がある。

T児の中国語の産出語彙は少なく、Y児の38語（パパ、ママ 2語が中国語と日本語がほぼ同音のため除く）に対してたった9語だけであった。中国語の理解語彙でも9語程度にとどまっている。

Table 3 Y児とT児の中国語語彙の獲得状況

語彙（日本語意味）	Y児月齢	T児月齢
爸爸（パパ）	11	12
媽媽（ママ）	12	10
点心（お菓子）	13	
没有（ない）*	13	17
有（ある）*	13	(13)
吃（食べる）*	13	
爺爺（ジージ）	14	
奶奶（バーバ）	14	
不（いや）*	14	(16)
弟（弟）	14	
狗（いぬ）	15	
馬（うま）	15	18
牛（うし）	15	
老虎（とら）	15	
猪（ぶた）	15	
大象（ぞう）	15	(15)
猫（ねこ）	15	
花（花）	15	(9)
鞋（くつ）	15	(15)
再見（バイバイ）	16	19
車（車）	16	19
風車（風車）	16	
積木（積木）	16	
球（ボール）	16	(13)
気球（風船）	16	
麦子（麦）	16	
稻子（稲）	16	
魚（魚）	16	18
蝴蝶（蝶々）	17	
蜜蜂（蜂）	17	
蚂蚁（蟻）	17	
駱駝（駱駝）	17	
阿姨（おばちゃん）	17	
烏龜（亀）	18	
看（見る）*	18	19
青蛙（蛙）	19	
熊猫（パンダ）	19	(15)
汽車（バス）	20	19
長頸鹿（きりん）	20	(14)
猴子（さる）	20	(14)

註（ ）内の数字はその語彙が中国語で理解できる月齢をあらわす *は述語である

T児とY児の中国語の産出語彙量の比較を以下のFig. 2に示す。

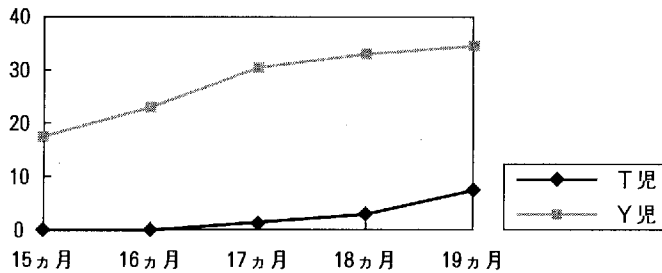


Fig. 2 T児とY児の中国語の産出語彙量

T児の日本語の産出語彙量とY児の中国語の産出語彙量を比べ、Y児の方がやや産出量が多いものの、T児と大きな差がないことが分かった。Fig. 3はY児の中国語とT児の日本語の産出語彙量を示す。

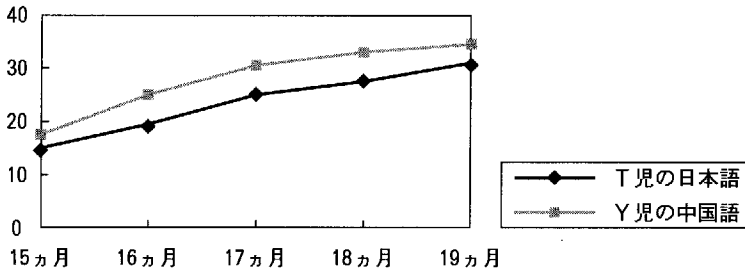


Fig. 3 Y児の中国語とT児の日本語の産出語彙量

また、T児の場合、17～18ヵ月に、中国語で質問されるのに対して日本語で返事する会話が顕著になっていたが、19ヵ月に入ってから日本語と中国語混用で返事する会話が見られた。次の例1～3はその会話の内容をあらわす。

例1 (場面：道でバスを見ていた時。17ヵ月)

- 母：汽車有没有(バスある)?
 T児：ない。
 母：汽車来了(バスが来た)。
 T児：(喜ぶ)アアア(指でさして)。
 母：跟汽车再见(バスとバイバイ)。
 T児：バイバイ(手を振って)。

例2 (場面：保育所のお迎えの時間。18ヵ月)

- 母：ともちゃん、坐下(おすわり)。
 母：ともちゃんの鞋在哪儿呀(ともちゃんのくっどこ)?
 T児：くっく(自分のくつを指す)。

ママ, ママくっく (母のくつを指して, 「ママのくつ」の意味)

例3 (場面: お風呂場でおもちゃのアヒルを遊んでいる時。アヒルの目はお湯にかかったら, 目玉の黒いところが白くなる。19ヵ月)

母: 鴨子的眼睛有没有 (あひるさんの目がある)?

T児: ガーガー, ない。

母: 鴨子的眼睛有没有?

T児: ガーガー, 没有, 没有。(「有」がはっきりしない)

母: 鴨子的眼睛有没有?

T児: めめ, 没有。

考 察

先ず言語の認知的要因であるが, T児の月齢が6ヵ月になるまでは, 日本語で, または中国語で話しかけた時, ほほえみや凝視はしていたが, 特別な反応はしなかった。ところが, 月齢が6ヵ月に入って, 何度も母に中国語で話しかけられた時はたいへん不思議そうにじっと母を見ていた。まわりの環境は日本語を使用することが多い中, 中国語を聞いた時, これが自分のいつも聞いている言葉と違うものであると弁別しているようであると考えられる。これはKuhl et al. (1997) の研究で日本人乳児が6ヵ月時「r」と「l」の違いが聞き分けできると類似したような結果である。

T児には月齢6ヵ月以降も時々中国語を聞かせていた。このような異なる言語の音韻の弁別能力を保持せつづけることは, のちに月齢12ヵ月ころから計画的に日本語と中国語の二言語を聞かされる時, 正しい音韻で語彙を理解することから, 正しい音韻で語彙を産出することへと発展するのに役に立つと考えられる。Table 2に示したように, 日本語と中国語の語彙の音韻的理解はおおよそ10ヵ月ころから発達してくる。一般的に, 日本語は発音が平坦で, 母音構造が単純という特徴があり, 一方, 中国語は抑揚や巻舌音があり, そして母音構造が複雑という特徴がある。T児の場合はほぼ同時期に日本語と中国語の二言語で同じ物の名称が理解できている。これは一つの物, 事に対して異なる二つの音韻表現があると気付いたと考えられるであろう。ところが, 語彙の産出に至っては中国語が遅れていることが明らかである。これは日本語, また日本の文化の独特な要因と言語入力的环境的要因が働いていると考えられる。

オノマトペの使用は日本語の独特なところである (小椋, 1999)。子どもにとってオノマトペは発音をしやすく, 獲得が早いことがある。Table 1に明確に現れているが, T児の場合もオノマトペが産出日本語の中で早い時期に獲得された。一方, 中国語にも「ワンワン」, 「ガーガー」のようなオノマトペがあり, その発音が動物の名前ををあらわすものではなく, 動物の鳴き声を表現している。中国では, 子どもにも「いぬ」, 「あひる」に当たる中国語の語彙「狗」, 「鴨子」を教える。T児の産出語彙は日本語と中国語と同音, あるいはほぼ同音の語彙6語を除いて, その比は31:7である。T児の現在の月齢が19ヵ月であるため, 日本語の産出語彙は小椋

(1999) 研究の50語にはまだ達していない(小椋, 1999の研究では被験児の月例は12~21ヵ月である)。しかし、T児の産出した37語はほぼ小椋の研究の50語に含まれている語彙である。また、中国語の産出語彙はたった7語だけであったが、理解語彙は15語であり、その中、日本語のオノマトペを除いて、中国語語彙の理解に達した月齢はほぼ日本語と同じか、やや遅れているかとなっている。また、Table 2 に示しているように、まだ産出はできないが、理解はできる日本語の語彙に対して、中国語もほぼ同じ月齢で理解ができるものが大きい割合を占めている。理解の段階において、日本語と中国語は大きな差がないように見られる。

次に日本の文化的要因を考えるが、日本語語彙の中では、社会的なやりとり語が子どもが早い段階で産出あるいは理解できる。たとえば、「ハイ」(呼ばれる時の返事として)、「ありがとう」、「ごめんなさい」である。日本の親が子どもにこのような言語を入力していることは「日本では人と人との社会的、情緒的コミュニケーションを非常に重視し、親の行動はこの日本文化に規定されている」(小椋, 1999) からなのである。

Table 1 と Table 2 の結果をとおして、T児において全体的に日本語の産出語彙が多く、中国語が少ないことが分かった。また日本語の理解語彙と中国語の理解語彙はほぼ同じ月齢で理解できている。日本語と中国語の産出語彙の量の不均衡は、この段階のT児は産出二言語使用者ではなく、受容二言語使用者にとどまっているように考えられる。しかし、ここで先ず性差の要因を考えなければならない。T児の音韻理解の発達は著しいが、中国語の産出においてはY児と比較した結果、語彙の不均衡が目立った。一般的に女の子の場合、言葉の獲得が平均的に男の子より早いという要因もあるので、女の子の方が語彙獲得においてややリードする傾向がある。

T児の中国語の産出語彙が少ないことは、言語入力、特に中国語の入力に問題があるのではないかと思われる。なぜなら、中国語入力者としての母は、T児に保育所などの集団生活に馴染ませるため、日常では日本語、中国語の順で二言語併用していた。結局日本語の語彙の産出は日本人の子どもとはほぼ一致した結果が得られたが、中国語の入力はほとんど日本語の訳であるため、子どもにとって必ずしも産出しやすい語彙ではない。言い換えれば、どの言語の語彙でも子どもにとって産出しやすいものから産出できるので、T児の場合は、母親の言語入力はこのような特徴を無視したため、中国語の産出が遅れたのではないかと考えられる。T児はこれから言語の語彙獲得量が急速に増える月齢に入るので、言語入力を適切に調整すれば、中国語の産出が促進されることが期待できるだろう。

本研究の結果は仮説1の「乳児期の比較的早期の段階から二言語を併用して聞かせることはのちに言語獲得年齢になる時、二言語を併用すること(産出二言語)が可能になることに大いに関わる」を基本的に支持できると考えてもよいであろう。

Table 3 はY児とT児の中国語の産出語彙と理解語彙の獲得状況を示す。日本在住のT児の中国語の産出語彙が中国在住のY児より遥かに遅れているという結果となっている。T児にとって、家庭内では中国語環境があるが、周囲の日本語環境が圧倒的に優位であるため、中国語の入力頻度は日本語に匹敵しなかった。またY児とT児の中国語の入力頻度の違いは家族構成の要因にもある。T児は母といっしょの時に限って、中国語の入力があるが、また同時に日本語

の入力も母から受けられるので、中国語の入力頻度は半減してしまうことになる。一方、Y児の場合、周囲の環境はすべて中国語だけではなく、家族の4人の大人の中、必ずと言ってもいいほど誰かがY児といっしょにいる。また、Y児は絵本が好きで、よく祖父母や父母に絵本を読んでもらっているそうである。Y児の家族からの報告では、Y児が絵本から多くの語彙を覚え、理解したそうである。Table 3には紙幅の都合でY児の中国語の産出語彙だけを示し、理解語彙は多いが省略した。Table 3の結果は仮説2の「子どもに日本で中国語を習得させる場合、家庭内中国語環境があるにもかかわらず、周囲の日本語環境が優位であるため、中国語の習得は中国在住の中国人子どもと比べ、中国語の獲得の遅れが見られる」を支持する。

Y児の中国語の産出語彙を分析してみると、父、母を除く人物の名称、たとえば、日本語で当てはめると「ジージ」、「バーバ」、「おばちゃん」に当たる人物の名称が、小椋(1999)の日本の子どもの平均産出月齢と比較し、それぞれ「ジージ」は14:18ヵ月、「バーバ」は14:18ヵ月、「おばちゃん」は17:18ヵ月となり、Y児の方が日本の子どもより早く獲得した。中国ではまだ祖父母と同居の家族がかなりあり、絵本にもよく大家族を描くものが多い。そして、小さい子どもにも絵本でお年寄りを大事にするような道徳教育をしている。それをとおして子どもが早く人物の名称を覚えるとも言われる。Y児の場合はどっちに属するかははっきりしないが、被験児を増やして研究すると興味深いかもしれない。

Y児の産出中国語の語彙を品詞で分類すると、名詞が圧倒的に優位であるという特徴が見られた。名詞の中に動物の名称をあらわすものが最も多く、次は積木、ボール、風船のようなおもちゃ類の名称がある。Tardif(1996)は米国と中国の親子の絵本場面と機械玩具場面の産出語彙を研究し、絵本場面においては米・中両国とも子どもの産出語彙が名詞優位であるが、機械玩具場面においては両国とも動詞優位であるという。Y児が絵本が好きである面があるため、中国語の産出語彙に名詞優位は絵本の影響が大きいのではないだろうかと考えられる。

小椋ら(1997)の研究では、日本の子どもは米国の子どもに比べて、語彙獲得のスピードが約2ヵ月遅れていると報告した。日本の養育者のオノマトペ使用の多さは、子どもに語彙を獲得しやすいようにという配慮からなされたものであるが、かえって、日本語の語彙獲得を遅らせているかもしれないと言われる。オノマトペは大人が子どもに限って使うもので、成人語とは系統の全く違う「語」や成人語からの音韻転化によってできているものである。大人同士には使わない。子どもにとって大人同士の会話を参照して語彙を獲得することは困難である。一方、オノマトペの使用の少ない英語圏や中国語圏の子どもは語彙の参照範囲が広く、語彙の獲得に有利であると考えられる。本研究は事例研究であるため、被験児T児とY児の中国語の産出語彙の不均衡がオノマトペによるかどうかははっきりしない。オノマトペの使用は語彙獲得を遅れさせる原因であるかどうかは今後さらに研究する必要がある。

例1～3のT児と母の会話では、T児は17～18ヵ月の時、母に中国語で話しかけられたにもかかわらず、日本語で返答している。これはTaeschner(1983)が提言した「初期一言語システム説」の第一段階:「二言語の同義語で表現することができない段階」に当たると考えられる。T児にとって「ない」という表現は日本語では「ない」、中国語では「没有」の両方が産出できるが、中国語で聞かれても日本語の「ない」で答えてしまう。しかし、19ヵ月に入ってから、

最初は中国語で聞かれても日本語の「ない」で答えたが、母が中国語で反復して話しかけると、中国語で「没有」で答えるようになった。「ない」と「没有」は同じことに対しての二つの表現であるという意識が芽生えてきたようである。これは「初期一言語システム説」の第二段階、つまり、「語彙レベルの二言語の分離：二言語の同義語で表現することができる段階」へと発達してきたように見られる。

劉（1995）の「中国語を正しく使えるようになったのは子どもが3歳ころになって、二言語を使用しているという言語意識の芽生えによるものである」という主張が正しければ、T児が完全な産出二言語使用者になるまで最低あと1年半くらいかかる。T児が「一人の人間は一つの言語で」、つまり、語彙システムも統語システムも分離された二言語でそれぞれ相手の使用言語にあわせて対話することができ、本当の二言語使用者になるまで、どんな道程を辿るか、日本語と中国語の二言語に対する認知スタイルにそれぞれどのような特徴があるか、二言語のそれぞれの言語入力環境要因がどのような働きをするかは、今後T児の言語発達の過程に沿って研究し続けたい。

謝 辞

本論文作成にあたり、ご指導、ご示唆を賜りました京都大学大学院教育学研究科教授子安増生先生に厚く感謝申し上げます。

引用文献

- フォイエルバッハ, A.V. 中野善達・生和秀敏(訳) 1991 カスパー・ハウザー 福村出版
林 安紀子 1999 声の知覚の発達, 桐谷 滋(編) ことばの獲得 ミネルヴァ書房
Kuhl, P.K., Deguchi, T., Hayashi, A., Stevens, E., Dugger, C., Iverson, K. 1997 Effects of language experience on speech perception: American and Japanese infants' perception of /la/ra/. Abstract submitted for Fall 1997 ASA meeting in San Diego.
劉 郷英 1995 中国語と日本語の二言語環境における1歳から3歳までの幼児の言語発達 京都大学教育学部紀要 41, 217-228.
小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり 1997 母親の育児語と子どもの言語発達, 認知発達 神戸大学発達科学部研究紀要 5(1), 1-14.
小椋たみ子 1999 語彙獲得の日米比較, 桐谷 滋(編) ことばの獲得 ミネルヴァ書房
スコウラップ, R. 1993 日・英オノマトペの対照研究 月刊言語 22(6), 48-55.
Tardif, T. 1996 Nouns are not always learned before verbs: evidence from Mandarin speakers' early vocabularies. *Developmental Psychology*, 32, 492-504.
Tardif, T., Shatz, M., & Naigles, L. 1997 Caregiver speech and children's use of noun versus verbs: A comparison of English, Italian, and Mandarin. *Journal of Child Language*, 24, 535-565.

(博士後期課程3回生, 教育心理学講座)